

# Andrew Marvell の “The Garden” における〈聖なる数学〉

大木 富

一般科

## “Holy Mathematics” in Andrew Marvell’s “The Garden”

Tomu OHKI

### Abstract

The purpose of this paper is to interpret the elaborate numerology of Andrew Marvell’s “The Garden”, which to the best of my knowledge has never been examined. As Butler(1970) and Heninger(1974) pointed out, Marvell applied the principle of numerical proportion and mathematical harmony to poetical composition. Fowler(1970) discussed “the numerology of the center” of “An Horatian Ode” and “The First Anniversary”. Røstvig(1977) referred to Marvell’s use of the circular number 5 in the analysis of the circular structure of “Upon Appleton House”. Ohki(1999) analyzed the intricate number symbolism in “Upon Appleton House”. The first section considers the symbolism of the circles and the number 5, especially the human figure in the shape of pentagram that is the symbol of man as the microcosm corresponding the macrocosm. The second section analyzes the other symbolic numbers. The last section examines the correspondence of the number symbolism in “The Garden” and “Upon Appleton House”.

16・17世紀の他の詩人たちと同様に Andrew Marvell は「数学的比例・調和」をその詩作原理とし、詩に幾何学的比喩を用いた<sup>(1)</sup>。

Andrew Marvell の数のシンボリズムすなわち数秘術の使用に関しては、A. Fowler が “An Horatian Ode upon Cromwel’s Return from Ireland”, “The First Anniversary of the Government under O.C.” 等の詩に「中心の数秘術」の使用を論じ、M.-S. Røstvig が “Upon Appleton House, to my Lord Fairfax” を含む2つの詩の円環構造の分析に際して数のシンボリズムに言及したが、それらの論考を踏まえて、筆者は別の場所で “Upon Appleton House” の複雑な数秘術を詳細に検討した<sup>(2)</sup>。

“Upon Appleton House” はその表題が示すとおり Marvell が当主 Fairfax の娘 Mary の家庭教師としてアプルトンの屋敷に滞在してい

る時代の作である。この詩は当主及びその娘の美德と、その美德を反映するアプルトン邸のすべての構成要素(屋敷の建物・庭等)の称賛を数のシンボリズム、特に数5と8の象徴性を巧みに駆使してうたう。

一般的定説に従えば、この時代に書かれたとされる “The Garden” においても、Marvell の数への関心はたとえば「2が1になる」というネオ・プラトニズムの恋愛哲学の数論を応用した第8スタンザ最終カプレットに端的に示されている。

本稿では “The Garden” の数秘術に関して、詩自体の構造を含め多用される円環の象徴と数5のシンボリズムの関係の分析を糸口として考察し、さらに “Upon Appleton House” のうたう庭を象徴する数のシンボリズムとの比較・対照を試みる(以下、象徴としての円・球を総称して円環と呼ぶ)。“The

Garden”の庭と“Upon Appleton House”のそれは明らかにその形態を異にする。しかし、両者は数のシンボリズムの次元においては同一であり、“The Garden”の庭は“Upon Appleton House”の森ともそのシンボリズムを共有する。このことは2つの詩が同じ庭を題材とする同時代の詩であることを示唆すると言えよう。そうであるとすれば、“Upon Appleton House”とおなじく当主賞賛の詩として“The Garden”の数秘術も当主を楽しませるという第1目的に寄与し、遊技的表層をもつと言える。

### I. 数5と円

G. Poulet は「円環」というトポスの包括的研究において Marvell の“On a Drop of Dew”の「露の雫」という円環のシンボルを例にとり、Marvell がいかに巧みに且つ美しく小さな円・矮小な球体に大宇宙と照応する小宇宙のイメージをとらえ、うたうかを指摘した<sup>(3)</sup>。

同様に M. H. Nicolson は、17世紀の英詩にあらわれる円環の象徴の分析において Marvell の円環に至妙な技巧と卓越した美をみとめ、「露の雫」を含めたいくつかの例とともに“The Garden”第5スタンザの「果実の円環」をその一例としてあげている<sup>(4)</sup>。

What wond'rous Life in this I lead!  
Ripe Apples drop about my head;  
The Luscious Clusters of the Vine  
Upon my Mouth do crush their Wine;  
The Nectaren, and curious Peach,  
Into my hands themselves do reach;  
Stumbling on Melons, as I pass,  
Insnar'd with Flow'rs, I fall on Grass.  
(第5スタンザ)

ここには「林檎、葡萄、ズバイモモ、桃、メロン」の合計5つの果実(球体)が「円環」の象徴として登場する。

“The Garden”における Marvell の「円環」の使用は第5スタンザにおける5つの円環に留まらず、“The Garden”全体が円環構造を形成しており、その構造をたとえば5番目のスタンザに円環を5つ配置することに端的に示されているように、数秘術、特に数5のシンボリズムによって示唆・強調する。

伝統的に数秘術が詩に用いられる場合、

作品の巻数、全体の行数・語数・スタンザ数あるいは各スタンザの総詩行数などに数のシンボリズムを表したり、特定の語や内容をそれが配置される数的位置に象徴させる、また全体をその数的中心の位置からシンメトリーな構成にする。

“The Garden”は1連8行、総計9つのスタンザから成る。この総スタンザ数の9は数のシンボリズムの伝統から「球」を表す数であり、総スタンザ数は“The Garden”の円環構造を表象する。

“The Garden”の全9スタンザのそれぞれ第1行目に着目すると、3つのスタンザ、第1スタンザと最終の第9スタンザはともに“How”で、上記引用の第5スタンザは“What”ではじまる感嘆文である。最初と最後のスタンザを同じ始まりとすることは両スタンザを結びつけ、詩を円環に構成する。その2つのスタンザと同じく第5スタンザを感嘆文ではじめることはこの詩の数的中心に位置する第5スタンザが円環を形成する詩の中心であることを強く示唆し、数のシンボリズムの目印ともなっている。第5スタンザに円環の象徴を5つ配置することも単純な数秘術の使用であるが、伝統的な「中心の数秘術」によって「円環」を強調し、第1スタンザと第9スタンザがすなわち最初と最後が結びつくことを強く表し、且つ数5を強調しているといえる。

「中心の数秘術」とはまさしく詩の数的中心に位置する詩行・スタンザで強調する主張・思想を語ることである<sup>(5)</sup>。A. Fowler は“An Horatian Ode”等の詩を取りあげ、Marvell の「中心の数秘術」を分析している。Fowler によれば、Marvell の用いる「中心の数秘術」は通常のものとは異なり、賞賛の詩の数的中心の位置に賛美の対象である主人公の威厳ある人物像ではなく曖昧な・意外なイメージを置く。これは Marvell の対節法を強化する働きをする。たとえば、あくまでクロムウェルへの頌歌である“Horatian Ode”の数的中心の詩行において、その主人公クロムウェルの華々しく・雄々しい姿ではなく、国王チャールズの処刑の場面が語られ、「中心の数秘術」は逆手にとって用いられる。

“The Garden”の場合においても、数的中心の第5スタンザの内容はそれまでの詩の流れ「人間的なるものの否定」と「庭への隠遁と瞑想の勧め」と異なる。第4スタンザま

であくまで官能性を排除する姿勢をとり続けてきた語り手は突如として五感への耽溺の描写を「花にからまれ、草の上にたおれる」を結語としてあからさまに展開するのである。この耽溺には結語にある “fall” の含む2つの意味「死」と「墮落」によって性的エクスタシーと「原罪」のニュアンスが与えられる。「墮落」の意味は、S. Stewart が指摘する「林檎、葡萄の木、葡萄酒」等の持つ宗教的象徴性（原罪・十字架・キリストなど）<sup>(6)</sup>と相まって、樂園喪失の要因としての人間の五感・肉体を暗示する。この意味で第5スタンザのテーマは五感であり、Marvell はそれをスタンザの序数のみならず登場する円環の象徴の数に表象させている。数5は五感・男女の結合、結婚を象徴する数である<sup>(7)</sup>。

ただし、詩はあくまで五感を超越した精神の飛翔を内容とする。続く第6スタンザ以降、語り手は第5スタンザが語る「劣った快楽から」より高次の瞑想へとしりぞき、「魂の天への飛翔」へと向かう。この庭の官能性の強調は単に精神と対比される肉体性の強調ではなく、神の著した2冊の書物の1書「自然（被造物）という本」（当然もう1つは聖書）<sup>(8)</sup>を読む五感の肯定である。そして、その行為がもたらす五感の愉悦は肉体的エクスタシーとしての死、すなわち「肉体・五感の麻痺状態＝肉体からの解放」を指し、精神的法悦へと通じる。数5に代表される人間性は神の象徴である円環と結合することで、その完全性を獲得しなければならない。

それ故に五感を5つの円環で象徴しているのであるが、数5自体が循環数として、また球体運動の尺度として円・球と密接な関係を有する数なのである。Marvell と同時代の Sir Thomas Browne の *The Garden of Cyrus* (1658)あるいは Athanasius Kircher の *Oedipus Aegyptiacus* (1652)からわかるように、この数5と円の関係は17世紀には広く知られていたと考えられる<sup>(9)</sup>。

循環数とは5、6のようにその累乗の1桁目に常にその数自体が繰り返される数のことであり（たとえば、5、25、125など）、中世の数の寓意的解釈にも見られるように、円（球）の図形あるいは円（球体）運動に対応すると考えられた<sup>(10)</sup>。この循環数は “Upon Appleton House” でも使用され、数秘術的に重要な役割を果たす<sup>(11)</sup>。

一方、Browne が「球体運動の尺度としての数5」という概念の典拠としたと考えられる Charles de Bouelles によれば円・球を正確に1回転分ころがした場合、それが通った面積はその円の面積（球の場合は中心を通る断面積）の5倍であり、数5が球体運動の基準と考えられた<sup>(12)</sup>。

このようにして「中心の数秘術」、五感を象徴する5つの「円環」から導かれた円と数5の関連は、第5スタンザと感嘆文で結びつく最終第9スタンザの「香り高い黄道12宮」（“a fragrant Zodiack”）という数12と円環の象徴の存在に補完され、「球に内接する5つの正多面体」、特に正12面体をここに現出させる。第9スタンザではこの庭の形態上の特徴である花の日時計が黄道12宮にたとえられる。

S. K. Heninger が指摘するようにこの5つの正多面体はルネッサンスの幾何学において常套のトポスであった<sup>(13)</sup>。正4面体は火、正6面体は地、正8面体は空気、正20面体は水というように自然界を構成する4元素のそれぞれに、そして、黄道12宮と同数の正5角形からなる正12面体は球・天に対応し、宇宙全体を象徴する。数12と5からつくられ球に対応する正12面体と同じく、“The Garden” の庭は円環と数5と12によって象徴され、天の樂園＝大宇宙に照応する地の庭・樂園＝小宇宙として提示される。そして、第5スタンザでの数5の象徴としての意味が五感に代表される人間の肉体であることから、この小宇宙としての庭は “Upon Appleton House” との比較検討の際に問題とする「円の中で手と足を広げる五芒星形の間人像」—大宇宙に照応・対応する調和・比率をもつ小宇宙としての人間—に結びつく。

さて、数秘術の使用による「円環」の示唆・強調は「黄道12宮」を第9スタンザに配置することからも理解でき、その配置によって第9スタンザは第1スタンザと関連して、予言という枠組みから詩の円環構造を示唆する。

第9スタンザと第1スタンザがその1行目をともに感嘆文で始めることで結びつき円環を構成することは先に述べた。加えてこの両スタンザにはともに「円環」象徴が存在する。

How well the skilful Gardner drew

Of flow'rs and herbes this Dial new;  
Where from above the milder Sun  
Does through a fragrant Zodiack run;  
And, as it works, th'industrious Bee  
Computes its time as well as we.  
How could such sweet and wholesome Hours  
Be reckon'd but with herbes and flow'rs!

(第9スタンザ)

繰り返しになるが、第9スタンザでは「新しい日時計」(“this Dial new”)が「香り高い黄道12宮」(“a fragrant Zodiack”)にたとえられ、「円環」の象徴となる。そして第9スタンザ自体が円環を形成する。1行目は“How”ではじまり2行目には“flow'rs and herbes”があり、同じく最終のカプレットは“How”ではじまり、2行目の語を逆にして“herbes and flow'rs”でスタンザを締めくくる。

一方、第1スタンザでは、「棕櫚・柏・月桂樹」(“the Palm, the Oke, or Bayes”)の3種類の木がそれぞれ世俗の勝利・栄誉を表す冠として伝統的「円環」の象徴として機能し<sup>(14)</sup>、この詩のうたう庭の植物が編む「花輪」(“the Garlands of repose”)に對置される。

1行目を同じ感嘆文にすることで結びつく最初と最後の両スタンザにそれぞれ「円環」の象徴が存在することはこの詩の「円環構造」を示唆し、裏付ける。第1スタンザ最終のカプレットの「すべての植物が花輪を編む」(“While all Flow'rs and all Trees do close/ To weave the Garlands of repose.”)はその構造を暗示していたのである。

ただし、最終第9スタンザの「黄道12宮」は単に「円環」の象徴としてのみ作用するのではなく、それが暗示する占星術、すなわち予言という観点からも最終スタンザを第1スタンザに結びつける。

周知のごとく、占星術は黄道12宮を基本として成立する運勢判断・予言の術である。本来(旧宇宙像からすれば)、黄道12宮は第8天(恒星天)に位置するので、単純な数秘術的構成からすれば第8スタンザに配置すべきである。それを第9スタンザに位置させる真意は第1スタンザの「円環」の象徴に対応してここに同じ象徴を配置することで円環構造を示唆することだけではなく、占星術の角度からもその構造を指示することにある。すなわち、第1スタンザの「棕櫚の木」と第9スタンザの「勤勉な蜜蜂」(“th'industrious Bee”)は予言という観点

から強く結びつく。旧約の「士師記」4-5にあるように女予言者デボラは棕櫚の木の下に座し、その予言・啓示を獲得する。このデボラという名前はヘブライ語で「蜜蜂」を意味し、棕櫚と蜜蜂は結び付けて考えられた<sup>(15)</sup>。

確かに、第9スタンザの「勤勉な蜜蜂」にはいくつかの解釈が可能であり<sup>(16)</sup>、詩の文脈からは第一義的に花の日時計を飛び回る蜂を意味するものの、その日時計は黄道12宮と同一視されており、この「勤勉な蜜蜂」が蜜を運ぶ行為は、単に「時の計測」のみを結果としてもたらずだけではない。その行為は予言・啓示の暗示を内包する。

この「木の下での予言」という枠組みは第6スタンザ最終行の「緑の蔭での緑の想い(=瞑想)」(“a green Thought in a green Shade”)からも窺われるが、後述するように総詩行数72の象徴性にも関わることになる。なお、この枠組みを受け入れ「蜜蜂」をデボラと同一視すれば、彼女は12人の士師・裁き手・判事の1人であることから、「蜜蜂」は数12を指示し、黄道12宮とながり数秘術的にこの枠組みを補強するとと言える。

## II. その他の数

“The Garden” 第7スタンザには“Upon Appleton House” 第81スタンザと同じ表現が登場し、後者同様に数秘術的に配置され、その数的位置が同じ数のシンボリズムを発揮する<sup>(17)</sup>。

Here at the Fountains sliding foot,  
Or at some Fruit-trees mossy root,  
Casting the Bodies Vest aside,  
My Soul into the boughs does glide:  
There like a Bird it sits, and sings,  
Then whets, and combs its silver Wings;  
And, till prepar'd for longer flight,  
Waves in its Plumes the various Light.

(第7スタンザ)

1行目の“the Fountains sliding foot”は最初から数えて第49番目の詩行にあたり、“Upon Appleton House”の“my sliding Foot”は第81スタンザにある。この49と81は63を含め「生命の危機を表す3つの数」である。



数  $63 (= 7 \times 9)$  は大厄年を表し、その構成要素である  $7$  と  $9$  はそれぞれ肉体と精神を指し、 $49 (= 7^2)$  は肉体の、 $81 (= 9^2)$  は精神の危機をそれぞれ表す<sup>(18)</sup>。

“Upon Appleton House” の場合、この3つの数すべてがスタンザの序数として数秘術的意味を表す。 $49$  は死＝五感・肉体性の浄化を、 $63$  は第5元素を解放・獲得するための錬金過程（蒸留・浄化）がたとえられる死（ニグレド）と同じ死を、 $81$  はまさしく「滑りかける足」に含まれる生の不安定感＝死の危険性を表象する<sup>(19)</sup>。

一方、“The Garden” の場合、問題の表現は全体の第7番目のスタンザの1行目にあり、このスタンザの内容を端的に言えば、魂の肉体からの飛翔である。この「噴水」を洗礼の泉とする解釈もあるが<sup>(20)</sup>、それはともかくとして数  $7$  は浄化を表す数であり、同様に、詩行の序数  $49$  も  $7 \times 7 = 49$  として、その構成要素  $7$  の意味を反映して浄化を表すと伝統的に解釈された。そして、その噴水は「足をすべらせる、足元が滑りやすい」という形で死と関連する。3・4行目の「肉体という衣を脱ぎ捨てて、私の魂は枝へと滑るように飛んでゆく」が1行目の「噴水」と呼応して示すのは、エクスタシーすなわち宗教的恍惚状態であり、それは取りも直さず肉体からの解放＝五感の麻痺状態・死である。すなわち、この「噴水」の象徴的意味：死による浄化が数  $7$  と  $49$  によって示されているのである。

加えて、第7スタンザ最終行にある「様々な光」(“the various Light”)も数秘術的に配置されている。R. Wallerstein が Leone Ebreo 等を例にあげて指摘するように<sup>(21)</sup>、この光をネオ・プラトニズムの哲学から「虹」であるとすれば、虹＝7色が第7番目のスタンザに置かれていることになる。同じ虹でも W.

Empson は「創世記」9:11-17で語られる「契約の虹」と考える<sup>(22)</sup>。この虹はノアの洪水による浄化の後に神がかけたものである。Empson の解釈を採用すれば、この虹は先に見た噴水に表象される「水による浄化」に呼応するとも言えよう。

今まで見てきたように、“The Garden” に数秘術が存在するという立場から見ると、先に言及したスタンザ以外の各スタンザにも、大きく2つの数秘術：(1)「第5スタンザあるいは第7スタンザに見られた種類の数秘術」—第5番目のスタンザに円環の象徴を

5つ配置するという、いわば単純な数秘術、(2)「スタンザの序数の象徴性とそのスタンザの内容等の一致という数秘術」が確認できる。

(1) のケースは第2、第3、第4スタンザで用いられている。順に見てゆくと、第2スタンザでは、この庭の美德は人間の社会の間には見いだされることのない「静寂」(“Fair quiet”)と「純心」(“Innocence”)の2つであると語られ、その美德は2人の姉妹として擬人化される。

第3スタンザは、この庭での瞑想の勧めを人間の女性の美よりも、木々の美の方がまさっているのであるから木々を愛せよという形で恋愛の次元に置き換えて語る。その際、両者の美を「赤と白(＝人間)」対「緑(＝植物)」で対比する。主題となる美＝色は3つである。赤と白は女性の美の、緑は自然・肥沃・春の成長・新しき生命などの伝統的表象である<sup>(23)</sup>。

第4スタンザでは、ギリシャ神話の恋愛譚を例にとり、乙女を求める神々が結局は木々をえるという話を逆手に取り、人間よりも木々をたたえる。その際に具体的に取りあげられる神話上の登場人物は「アポロ、ダフネ、パン、シュリンクス」(“Apollo, Daphne, Pan, Syrinx”)の4人である。

次に(2)のケースに相当するのは、第6、第8スタンザである。第6スタンザでは瞑想における心・精神(“the mind”)の「大宇宙と小宇宙の照応の理論」を基礎とした創造の行為について<sup>(24)</sup>、「既存の被造物を無と化し」(“Annihilating all that's made”), 「それらを超えた世界・海を創り出す」(“Yet it creates, transcending these, Far other Worlds, and other Seas;”)とする。数  $6$  は神の天地創造の日数であることから、それを象徴する数であり、錬金術において六芒星は大宇宙を指す<sup>(25)</sup>。

数  $8$  は「楽園」を示す数であり<sup>(26)</sup>、第8スタンザでは楽園が主題となる。第8スタンザでは詩の賛美する対象である庭が「かの天の楽園」と同一視され、それを最終のカプレットで1と2の数を用いて表現する。最終のカプレット「楽園に1人だけで住めるとしたら／2つの楽園が1つになったようなものだろう」(“Two Paradises 'twere in one/ To live in Paradise alone.”)とは、ネオ・プラトニズムの恋愛哲学「2が1になる」、すなわち、「完全なる愛は2人を絶対的な1人とする」、を題材とする。その数論によれば、2である

ことは不完全であり、1こそ完全であるとなる。故に愛し合うものたちの魂は完全なるものとして1つに結合する。楽園からの追放以前にアダムは1人であったので楽園にいたことができたが、エバの誕生によって2人となり楽園を追われことになった。

すなわち、最終カプレットを文字どおり解釈すれば、「1ではなく2となっている人間」が楽園に住むということは「2である人間の尺度＝恋愛哲学」に当てはめて、「完全＝1である楽園」をして2が1になったと言ふようなものだ、となる。しかし、第1行目の「人が1人で天の楽園にいた時／その幸福な庭はこのような状態だった」(“Such was that happy Garden-state, / While Man there walk’d without a Mate:”)にわかるように、現在この庭で1人瞑想する語り手は完全なる1であり、2ではなく、この庭はかの楽園に等しい。ネオ・プラトニズムの恋愛哲学が説く数論の採用はこの庭がかの楽園に酷似することの、また瞑想する語り手がそこに回帰したことへの強調に寄与する。

実は、この(2)の数秘術は先に「円環」の問題で言及した第1、第9スタンザにおいても成立している。第9スタンザに関しては、伝統的宇宙像において第8天にある「黄道12宮」が、(2)の数秘術からすれば第8番目のスタンザに位置すべきであるところを、9番目のスタンザに置かれている数秘術的意味は先に述べた。しかし、花の日時計と対応する黄道12宮自体が円環であるという意味で、序数9の象徴性である球と符合し、(2)の数秘術も成り立つ。

第1スタンザでは、世俗の誉れの円環がこの庭の植物がつくる円環に対比される。前者の円環を形成するのは「1本の(single)草や木」であり、後者の場合は「すべての(all)の花々や木々」である。そして、両者の花輪の比較はそれらがつくる木蔭の量の相違に置き換えられ、1と多との数的対比に代表される<sup>(27)</sup>。すなわち、第1番目のスタンザで1と多の対比、多と比較される1がテーマとされるわけであり、(2)の数秘術の使用と考えられる。各スタンザにおける数秘術に関して補足して言えば、先に言及した第5スタンザの「林檎の木、葡萄酒」等の宗教的象徴性も数のシンボリズムによって示されている。スタンザの序数5はキリストの十字架上で傷の数であり、キリストの受難を象徴する数でもあ

る<sup>(28)</sup>。また、このスタンザははじめから33行目から40行目に位置する。33はキリストの生涯の年数であり、キリストを象徴する数であり、40は浄化・試練・罪の償いの期間を表す数である<sup>(29)</sup>。

ここまでくると、第1スタンザでの3種類の木の存在も偶然とは思えなくなる。第1スタンザと第9スタンザが結びつき、円環を構成することは確認した。9は3の2乗であり、3を構成要素とする。第1スタンザに登場させる木を3種類にすることは同スタンザと第9スタンザの関連を示唆していると言えよう。

最後に総詩行数の表すシンボリズムについて考えてみよう。

“The Garden”の総詩行数は72である。72は数の伝統的解釈方法の1つである「各桁の数字の総和による解釈」からすれば $72 = 7 + 2 = 9$ となり、総詩行数は総スタンザ数と一致して「球」を意味することになる。

さて、H. Meyerによれば、中世における数72の解釈は以下のようなになる<sup>(30)</sup>。数72はそこから世界の諸国民・言葉が生じた「人類の72部族」を指し、その部族に対応して神の福音を告知する聖書は72書で構成されており、また信仰をもたらすキリストの72人の弟子はこの部族の数に対応していると考えられる。そして、このキリストの弟子の数72は $24(1日24時間) \times 3(三位一体) = 三位一体への信仰の告知と分析される$ 。キリストは「救済の太陽」(sol salutis)・「公正・正当の太陽」(sol justitiae)であり、1日24時間の太陽の動きは全世界に光・啓示を与える。

この数72の意味は第9スタンザが伝えてくれる。第9スタンザの「穏やかな太陽」(“the milder Sun”)がシンボリズムの伝統から三位一体のキリストの暗示を含むことは明らかであり、この太陽の光は天の黄道よろしく庭園の花園の軌道を巡る。その太陽の運行は、地上での軌道である花園を日時計とされることで、明確に1日24時間という時間性を付与される。この花の日時計の実際には後述する3つの説が考えられるが、そのいずれをとってもつまるところ「時を知らせる(＝啓示を与える)」のは太陽の運行であることに違いはない。第9スタンザが持ち出す時間の原理の宗教的・形而上的問題とは別に、数のシンボリズムの次元で同スタンザは総詩行数72の意味を知らせて

いる。この詩は先に言及したように「予言・啓示」という点から、その円環構造が象徴的に示されていた。その啓示は庭という自然の瞑想を通して与えられる「庭という自然からの啓示」である。

もう一つの伝統的解釈は72を $72 = 8$ （復活） $\times 9$ （天使の共同体）と分析し、復活と天使の共同体への召集を表すと考える。この意味で “The Garden” の総詩行数を理解すれば、詩の内容「この庭にひきこもり、瞑想する者は天、あの樂園への回帰を目指す」にこれもまた符合する。

L. Abraham は “Upon Appleton House” の詳細な錬金術的解説において、特に “The Garden” との類似性が感じられる「森を語る箇所」の中にカバラの重要な概念である「セフィロトの木（逆立ちした木）」、あるいは内省（観照）による神への接近を目指すカバラ的文字操作の技術である「アナグラム」等のカバラ的要素が存在することを証明した<sup>(31)</sup>。

カバラの伝統からすると、72は神の名前あるいはそれを構成する文字数である。この名前は、それぞれ72のアルファベットで構成される「出エジプト記」14:19-21の3節からつくられた「シェム・ハ・メフォラッシ」（隠された・発音されない名前）であり、集約された神の全能の力・神の自己提示であると考えられた<sup>(32)</sup>。ルネッサンスにおいて Pico della Mirandola は、72文字でつくられる神の名前の神秘を強く意識し、*Conclusiones* 中に含まれるカバラ的結論の数を72とする<sup>(33)</sup>。Pico によって M. Ficino のヘルメス主義に付加されたカバラは、Johannes Reuchlin の *De Arte Cbalistica* (1517) に継承され、Agrippa, John Dee, Robert Fludd 等においてヘルメス主義の科学的面での応用である錬金術と融合する<sup>(34)</sup>。このカバラの数72の意味をアプルトン邸滞在当時、当主が没頭していたヘルメス主義研究に協力していた推測される Marvell はよく知っていたはずである<sup>(35)</sup>。“The Garden” をこの時期の詩であるとすれば、数72のカバラ的意味が、語り手の瞑想の場である庭、すなわち「自然という被造物の本」を著した造物主への賛歌でもある詩の総詩行数に反映されている可能性も考えられる<sup>(36)</sup>。

最後に72の数学的・天文学的意味<sup>(37)</sup>から総詩行数を考察すると、数学的意味としては72は円周の5分の1として円と関係す

る数であり、総詩行数は円と5の関係を指示する機能を果たしているとも考えられる。一方、天文学的意味としては、古代の Hipparchus の発見によって、歳差（黄道上での太陽の春分点の西方移動）が1年で50秒ずつ72年で1度になることは当時周知のことであり、72は黄道と関連する数でもある。この庭は完全なるものとして円環で象徴され、形態上の特性である花の日時計＝「香り高い黄道12宮」がその完全性を代表する。総詩行数は花の日時計、この庭そのものを指示する。

### III. 2つの庭園

上述のように、Marvell の “The Garden” は数秘術を駆使した作品であり、一般的定説によればアプルトン滞在時代の詩であり、同時代の作である “Upon Appleton House” も同じく数秘術を用いて庭をうたう。ただし、“Upon Appleton House” ではアプルトン邸の庭園部分を含め、この邸宅の敷地を構成するすべての要素についてうたわれる。

“The Garden” の創作年代を特定する際にも問題視されることだが、この2つの詩が同時期の詩であれば同じ庭をうたっているはずであると考えた場合、“Upon Appleton House” で語られる「庭園部分」（第36スタンザから第46スタンザ）の中心をなす花壇と “The Garden” のそれとではその形態的特徴が異なる。しかし、両詩の表現する花壇は数のシンボリズムの次元では同一の花壇である。

“Upon Appleton House” の場合、その花壇の形状は第36スタンザではっきりと「五稜堡要塞の形」とであるとされる。

From that blest Bed the *Heroe* came,  
Whom *France* and *Poland* yet does fame:  
Who, when retired here to Peace,  
His warlike Studies could not cease;  
But laid these Gardens out in sport  
In the just Figure of a Fort;  
And with five Bastions it did fence,  
As aiming one for ev'ry Sense.  
（“Upon Appleton House” 第36スタンザ）

一方、“The Garden” のそれは先に見たよ

うに「香り高い黄道12宮」にたとえられる「花の日時計」(第9スタンザ)を形づくっており、その庭には「噴水」(第7スタンザ)がある。

“The Garden”の「花の日時計」の実像に関しては川崎が自説を含め以下の3説に要約している<sup>(38)</sup>:(1)日照量に開花の時間が左右される花々が植えられている「生理学的日時計」(Grosart),(2)太陽光線によって指時計針がつくる影で時間を知らせるいわゆる原始的な日時計であり、その文字盤に花々が装飾として植えられているもの(Duncan-Jones),(3)ただ花々が植えられているだけであるが、太陽が昇り、花々が開花すると、自然とそこに集まる蜜蜂によって時刻が判断される時計」(川崎)。

上記3説のいずれを採用しようとも、この「日時計」は「香り高い黄道12宮」にたとえられ、天の黄道に対応する以上その幾何学的形状は円であり、この形態的特徴を象徴する数と図形は12と円である。

さて、“Upon Appleton House”の花壇の形状が明示される第36スタンザは軍隊の比喻を用いて当主の徳の高さ—五感すなわち肉体性がよく制御されていること—と、それを反映する庭園をうたうことを内容とする<sup>(39)</sup>。花壇の五稜堡要塞の形状が五感を象徴することは言うまでもない。このスタンザの序数36は「各桁の数字の総和による数解釈」から $36 = 3 + 6 = 9$ となり、球を表す。さらに、36は1から8までを順に加算した合計であり、8を底辺とする3角形を形成する3角数・完全数である。3角数の解釈はその底辺の数(数式の最後の数)に還元されるので、36は8の意味「調和・浄化」を表す。ここに成立する幾何学的数のシンボリズムによってこの花壇はスタンザの内容と一致して五感の完全なる制御を表象する。そして、この五稜堡要塞の形の花壇は循環数6を用いた数秘術によって第6スタンザで屋敷と当主を象徴した五芒星形の人間像に結合される。その人間像は円の中で手と足を広げ、両手・両足・頭部の5カ所を円との接点とし、「大宇宙に対応・照応する調和・比率を持つ小宇宙であり、万物の尺度である理想的建築原理・基準としての人体」を表す。同スタンザの序数6は数5と同様にその累乗の下1桁目に6が繰り返される循環数であり、6は36と結びつき、従って第6スタンザは第36スタンザと結合する。つまり、五稜堡要塞の形の花壇のシンボリズムは円と数5に還元され、こ

の庭の完全性と完全なる調和のとれた人間、すなわち屋敷の当主を象徴する。

この“Upon Appleton House”の花壇の数のシンボリズムは“The Garden”の庭のそれに一致する。

まず、“Upon Appleton House”の花壇の形状が語られるスタンザの序数36が伝統的解釈方法により9となることから、“The Garden”の花壇の形が語られるスタンザの序数と同一である。

次に、両詩の花壇の形態的特徴である数 $12 = \text{黄道12宮}$ と、数 $5 = \text{五稜堡要塞}$ のシンボリズムはともに五芒星形の人間という象徴に収斂する。

第5スタンザを解釈した際に確認したように第9スタンザの数12は第5スタンザの円と数5のシンボリズムを補強して五芒星形の人間像に結実する。“The Garden”の数的中心に位置する第5スタンザで登場する「円環」は5つであり、その個数とスタンザの序数はスタンザの内容を反映して五感を、その完全なる調和を円環がそれぞれ象徴する。そして、「中心の数秘術」によって強調される数5自体が循環数及び球体運動の尺度として円・球と関連する数である。ここに詩の構造としての円と中心の関係から第9スタンザが結びつき、円と数5の関連は12個の正5角形でつくられ球・宇宙全体に対応する正12面体を形成し、その正12面体は五芒星形の人間を意味する。

また、数12は第9スタンザ自体の中で5と結びついているとも考えられる。“The Garden”第9スタンザの「勤勉な蜜蜂」は人間の象徴でもある。人間は五感すなわち数5で象徴されるわけであり、その蜜蜂が花壇＝日時計＝黄道12宮を巡るということは幾何学的に言えば円(=12)の円周上あるいはその中に5があることになる。第5スタンザの場合と同様に第9スタンザにおいても円(黄道12宮)と5(人間)は結びつき、五芒星形の人間が現出する。

残る“Upon Appleton House”の序数36の3角数としてのシンボリズムに関しては、数12が長方形数であり、長方形数は2つの3角数の和(この場合は $6 + 6 = 12$ )であることから示されているとも言えるが、“The Garden”のもう1つの形態上の相違点である「噴水」の象徴性に表される。

この「噴水」は先に見たように数のシンボリズムから死・洗礼(水)による浄化を表し



たが、それは “Upon Appleton House” 第 36 スタンザの序数が 3 角数として示す図形「底辺を 8 とする 3 角形」と意味「浄化・洗礼・調和 (= 8)」に対応すると言える。3 角数の数秘術を用いた Shakespeare や Samuel Daniel にとってあるいは George Puttenham の詩形についての論述においてそうであったように当時 3 角形とピラミッド・オベリスクは同意語であった<sup>(40)</sup>。たとえば, “The Garden” との類似性が指摘される Henry Hawkins の *Partheneia Sacra* (1633) — 聖母マリアの瞑想と崇拜のための「庭のエンブレム・ブック」 — の扉絵に描かれる噴水の形状は大まかに言えば円錐状・尖塔形である<sup>(41)</sup>。

このように, “Upon Appleton House” の花壇の場合と同じ幾何学が “The Garden” のそれを象徴していることになり, その形態上の相違点にも関わらず, 少なくとも数のシンボリズムの次元では同一の庭と言えよう。このことは両詩が同じ庭をうたっていることの, また同時期の作品であることの証左となり得るかもしれない。

さて, “Upon Appleton House” と “The Garden” を比較した場合, 花壇の形態上の相違点とは別に, “Upon Appleton House” に比べ “The Garden” では「天の楽園に対応・照応する地の楽園」であり, それ故に瞑想に最適な場であるとして庭が提示・肯定され, 遊技性・政治・社会的要素が欠如しているなどの内容面での相違も指摘される<sup>(42)</sup>。

しかし, この「瞑想の場」という意味で川崎が Pierre Legouis の示唆を受けて指摘するように, “The Garden” の庭は “Upon Appleton House” の「森を語る箇所」(第 61 スタンザから第 78 スタンザ)と類似する<sup>(43)</sup>。しかも, 両詩の花壇が形態上の違いにもかかわらず数のシンボリズムにおいて共通するのと同じく, その類似性は数のシンボリズムの次元にも妥当する。

“Upon Appleton House” の「ヘルメス主義的瞑想を展開する森」は, 第 63 スタンザで「1 本の木」に束ねられ, 「1 本の大きな幹」(“one great Trunk”)を形成し, その属性は錬金術が求めた「万物に秩序と活力を与える第 5 元素」(“a Fifth Element”)に集約され, やはり数 5 で代表される<sup>(44)</sup>。

このスタンザの序数 63 は  $63 = 6 + 3 = 9$ , また同スタンザを含めた「森を語る部分」の総スタンザ数 18 は  $18 = 1 + 8 = 9$  であり, “The Garden” の総スタンザ数と一致し

て球を象徴する数となる。さらに, Stewart が第 9 スタンザを解釈して指摘するように “The Garden” の庭が「蜜蜂」との関連から「霊的蜜蜂」としての信者がその蜜を吸う教会であると考えられる<sup>(45)</sup>, “Upon Appleton House” 第 64 スタンザで森が木々を柱とし, 鳥たちを合唱隊とする「緑の教会・神殿」(“the Temple green”)という 1 つの実際の建造物として記述される事実にもこれまた一致することになる。

この森の教会は第 61 スタンザでそれを含めたアプルトン邸の敷地を流れる川の氾濫を逃れてきた場所であり, ノアの箱舟のイメージを付加されている。これは “The Garden” 第 7 スタンザの「噴水」の意味「浄化」に含まれた「ノアの洪水による浄化」に通じ, “Upon Appleton House” の川は “The Garden” において「噴水」に置き換えられていると言えよう。

そして, 実際の教会であり, 且つノアの箱舟であるとされることで, この森は建築原理としての五芒星形の人間像に結びつくのである。ノアの箱舟は「理想的建築原理としての人体の比率」を基に造られた代表的建造物と考えられてきた。故にこの森は錬金術の「第 5 元素」と「五芒星形」によって数 5 で象徴される。数 5 を共通項として, この「森」は同詩の「庭園部分」と関連し, その庭園部分と同じ数のシンボリズムを表す “The Garden” の庭と結びつくことになる。

“Upon Appleton House” の森と “The Garden” の庭の類似性は, 当主及びその娘の美德を反映し完全なる調和と秩序を示すアプルトン邸の構成要素である庭と森を敢えて人工と自然と言い換えれば, 同じ調和が “The Garden” の庭に縮約されて表現されていることを示していると言えよう。

“Upon Appleton House” 第 6 スタンザで語られるアプルトンの屋敷をつくる「聖なる数学」(“these holy Mathematicks”)は, 同じスタンザで提起された「円積問題」を続く第 7 スタンザで正しく「正方形が球になる」として解決・解答し, 当主と屋敷の完全性の賞賛を表す。古代ギリシャ数学の三大難問の一つである「円積法」すなわち「円の方形化」とは, 与えられた「円」と同じ面積の正方形をコンパスと定規で作図する問題のことであり, 正方形が表象する有限(物質界)を円が表す無限(神・永遠)にしようとする象徴的意味を持つ<sup>(46)</sup>。

“The Garden”の総スタンザ数9は球を象徴するわけであるが、9は同時に正方形数でもある。すなわち、“The Garden”がその総スタンザ数9によって球と同時に正方形であるとされることは、“Upon Appleton House”と同様に“The Garden”の語る庭が“Upon Appleton House”と同じ種類の「聖なる数学」で設計されていることを示唆する。“The Garden”が“Upon Appleton House”と同時代の作であるとすれば、後者と同様に“The Garden”第9スタンザの「巧みな庭師」(“the skilful Gardener”)は万物の創造主あるいは実際の庭師の他に、“Upon Appleton House”の庭園を語る部分に属する第44・45スタンザでの庭師のイメージと同じように当主をも指すと言える<sup>(47)</sup>。“The Garden”も「聖なる数学」によって当主及び彼の屋敷の庭の完全性を賞賛することを表層とする。この庭師が神であるとしても、自然を幾何学的に創造したという神のイメージは17世紀に共通する観念であった<sup>(48)</sup>。

### 注

- (1)この詩作原理の採用は献詩“On Mr. Milton's Paradise lost”に明らかである [Butler(1970), 154-5; Heninger(1974), 384-5]。幾何学的の比喩に関してはたとえば、Nicolson(1965:64)も例としてあげている“The Definition of Love”の第7スタンザなど。
- (2)Fowler(1970), 77-84; Røstvig(1977); 大木(1999)。
- (3)Poulet(1966), 24-7。
- (4)Nicolson(1965), 73-76。
- (5)Fowler(1970), 77-84。
- (6)Stewart(1966), 166-8; 川崎(1974), 117-8。
- (7)Fowler(1970), 148-51; Schimmel(1993), 105-6。
- (8)Curtius(1990), 302-47; 川崎(1974), 113-4。
- (9)Nicolson(1965:48-9)はBrowneが数5のこの2つの意味について言及していることに代表させて、*The Garden of Cyrus*を数5に関するのと同じく円に関する論考でもあると評した。
- (10)中世における数の寓意的解釈方法に関しては大木(1999), 292-3; Hopper(1938), 100-3; Meyer et al.(1987), XIII-XXIII; Schimmel(1993), 21-2。
- (11)大木(1999), 299, 303; Røstvig(1977), 259-60, 266。
- (12)Browne(1964), 350-1。
- (13)Heninger(1974), 107-11, 156。
- (14)詩集各版の当該注参照。
- (15)de Vries(1984), 42a。

- (16)de Vries(1984), 41a-43a; 川崎(1974), 137。
- (17)川崎(1974: 128-9, 260)もこの2つの表現に着目し、生の不安定感を指摘している。
- (18)Butler(1970), 145; Roche(1989), 351。
- (19)大木(1999), 304-7。
- (20)川崎(1974), 129。
- (21)Wallerstein(1950), 329-31; 川崎(1974), 127。
- (22)Empson(1986), 127; 川崎(1974), 127。
- (23)緑の錬金術上の意味についてはRøstvig(1961), 344; ; Abraham(1998), 91-2。
- (24)川崎(1974), 123-4。
- (25)Schimmel(1993), 122-4。
- (26)Schimmel(1993), 156-7。
- (27)川崎(1974:100-1)はStewart(1966:163)の解釈を引用しつつ、この置き換えの意味を第8スタンザの最終カプレットと関連させて考察する。Stewartによればこの木蔭の量の相違はエデンの楽園における人間の状態と失楽園後のそれを指す。
- (28)Meyer et al.(1987), 403-42。
- (29)Meyer et al.(1987), 704。
- (30)Meyer et al.(1987), 760-4。
- (31)Abraham(1990), 171, 181-88。
- (32)MacQueen(1985), 135; Schimmel(1993), 264; Yates(1964), 102; Waite(1992), 617-8。
- (33)Yates(1964), 102; Yates(1979), 17-22。
- (34)Abraham(1990), 182; Yates(1964); Yates(1979)。
- (35)Abraham(1990), 22-3; Røstvig(1961), 338。
- (36)この詩は「庭での瞑想の勧め」と「その瞑想の場としての庭の完全性の賞賛」を語っているのであり、それはカバラ的な「神の御名の瞑想」と関連しなくもない。
- (37)Schimmel(1993), 264。
- (38)川崎(1974), 96。
- (39)以下、“Upon Appleton House”の庭の数のシンボリズムに関しては大木(1999), 302-4。
- (40)Fowler(1970), 187; Puttenham(1936), 95-6。
- (41)Freeman(1978), 173-98; 川崎(1974), 95; Stewart(1966); Wallerstein(1950), 304, 399。その扉絵はFreeman(1978)の図版28とStewart(1966)の図版12としてその写真版が掲載されている。
- (42)川崎(1997), 182。
- (43)川崎(1997), 182-3。
- (44)以下、森の数のシンボリズムに関しては大木(1999), 305-7。
- (45)Stewart(1966), 181。
- (46)Heninger(1974), 111-15。
- (47)川崎(1974), 96-7。
- (48)Heninger(1974), 206-14。

## テキスト

Marvell, Andrew. *The Poems and Letters of Andrew Marvell*. Ed. H.M. Margoliouth. 3rd.ed. Rev. Pierre Legouis with the collaboration of E.E. Duncan-Jones. 2vols. Oxford: Clarendon Press, 1971. をテキストとし、以下の諸版を参照した。Andrew Marvell: *Complete Poetry*. Ed. George deF. Lord. London and Melbourne: Everyman's Library, 1984; *Andrew Marvell*. Ed. Frank Kermode and Keith Walker. Oxford and New York: Oxford University Press, 1990; *Andrew Marvell: The Complete Poems*. Ed. Elizabeth Story Donno. Harmondsworth: Penguin Books, 1996.

## 参考文献

Abraham, Lyndy(1990). *Marvell and Alchemy*. Aldershot, Hants: Scolar Press .  
 Abraham, Lyndy(1998). *A Dictionary of Alchemical Imagery*. Cambridge: Cambridge University Press .  
 Browne, Sir Thomas(1964). *Religio Medici and Other Works*. Ed. L.C.Martin. Oxford: Clarendon Press.  
 Butler, Christopher(1970). *Number Symbolism*. London: Routledge and Kegan Paul .  
 Cirlot, J.E(1971). *A Dictionary of Symbols*. Trans. J. Sage. 2nd ed. London and Henley: Routledge and Kegan Paul .  
 Curtius, E.R.(1990). *European Literature and the Latin Middle Ages*. Trans. Willard R. Trask. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.  
 de Vries, Ad. (1984). *Dictionary of Symbols and Imagery*. Rev. ed. Amsterdam: North-Holland Publishing Company.  
 Empson, William.(1986). *Some Versions of Pastoral*. London: The Hogarth Press.  
 Fowler, Alastair(1970). *Triumphal Forms: Structural Patterns in Elizabethan Poetry*. Cambridge: Cambridge University Press.  
 Freeman, Rosemary (1978). *English Emblem Books*. New York: Octagon Books.  
 Heninger, S. K., Jr.(1974). *Touches of Sweet Harmony: Pythagorean Cosmology and Renaissance Poetics*. San Marino, California: The Huntington Library.  
 Hopper, Vincent Foster(1938). *Medieval Number Symbolism*. New York: Columbia University Press.  
 川崎寿彦(1974). 『マールヴェルの庭』(研究社).  
 川崎寿彦(1997). 『庭のイングランド』(名古屋大学出版会).  
 MacQueen, John(1985). *Numerology: Theory and Outline History of a Literary Mode*. Edinburgh: Edinburgh University Press.  
 Meyer, Heinz, und Rudolf Suntrup(1987). *Lexikon der*

*mittelalterlichen Zahlenbedeutungen*. München: Wilhelm Fink Verlag.

Nicolson, M. H.(1965). *The Breaking of the Circle: Studies in the Effect of the “New Science” upon Seventeenth-Century Poetry*. Rev. ed. New York and London: Columbia University Press.

大木 富(1999). 「象徴としての数—アンドルー・マールヴェルの〈アプルトン邸、フェアファクス卿に〉」『マージナリア—隠れた文学／隠された文学』村田・森田編(音羽書房鶴見書店), 291-313.

Poulet, Georges(1966). *The Metamorphoses of the Circle*. Trans. C. Dawson and E. Coleman. Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins Press.

Puttenham, George(1936). *The Arte of English Poesie*. Ed. G.D. Willcock and A. Walker. London: Cambridge University Press.

Reuchlin, Johann.(1983). *De Arte Cabalistica*. Trans. Martin and Salah Goodman. Intr. G. Lloyd Jones. New York: Abaris Books.

Roche, T.P., Jr.(1989). *Petrarch and the English Sonnet Sequences*. New York: AMS Press.

Røstvig, Maren-Sofie(1959). “Andrew Marvell’s ‘The Garden’: A Hermetic Poems.” *ES*, XL, 65-76.

Røstvig, Maren-Sofie (1961). “‘Upon Appleton House’ and the Universal History of Man.” *ES*, XLII.

Røstvig, Maren-Sofie(1977). “In ordine di ruota: Circular Structure in ‘The unfortunate Lover’ and *Upon Appleton House*.” *Tercentenary Essays in Honor of Andrew Marvell*. Ed. Kenneth Friedenreich. Hamden, Connecticut: Archon Books, 245-67.

Røstvig, Maren-Sofie(1994). *Configurations: A Topomorphical Approach to Renaissance Poetry*. Oslo: Scandinavian University Press.

Schimmel, Annemarie(1993). *The Mystery of Numbers*. New York: Oxford University Press.

Scholem, Gershom (1961). *Major Trends in Jewish Mysticism*. New York: Schocken Books.

Stewart, Stanley(1966). *The Enclosed Garden*. Madison, Milwaukee and London: University of Wisconsin Press.

Wallerstein, Ruth(1950). *Studies in Seventeenth-Century Poetics*. Madison: University of Wisconsin Press.

Yates, Frances A.(1964). *Giordano Bruno and the Hermetic Tradition*. London: Routledge and Kegan Paul.

Yates, Frances A.(1979). *The Occult Philosophy in the Elizabethan Age*. London: Routledge and Kegan Paul.

Waite, A.E.(1992). *The Holy Kabbalah*. New York: Citadel Press.